明治七年一月ヨリ
四月ニ至ル

合要類纂

巻之六拾四

経伺之部

相用ケ一ハ器械等術ニ於ケ一ハ実地ニ於テ業ヲ為ス
生徒ニ至迄モ速ナルベク如此ナレバ不数年ニ而工技藝
弥盛大ニ至リ到底ハ國益トモ相成可申存候然ニハ
當校教導ノ教師モ在留同校西ニ来リ使フノ得
ルノミナラス工業生徒モ親ク実地製作ヲ見学スル
ノ益ヲ得彼此ニ於テ實ヶ速ニ成功可相成候間右
用當校構内元仲間建教場跡ニ付便宜ニ整
此場内ヘ而設置致シ度候依テ別紙繪圖面相添
至急御指揮有之度此段相伺候也

開成学校

六年十二月二十二日

伴正順

畠山義成

田中文部少輔殿

伺之通

但入費之儀ハ前以一々可伺出事

明治七年一月七日

文部少輔田中不二麻呂印

蘭のウエルベツキへ依托致候器械之雛
英國より来着いたし候ニ付テハ右翻譯之方ト
シテ書籍掛瀧澤勝次郎并教授手傳雇
樋口安信両人至急横濱表ヘ差遣為致度
此段去伺候旅費之手當之儀ハ前途ニ
従前之通ニ候也

明治七年一月八日

開成学校
伴正順
畠山義成

田中文部少輔殿

東京開成學校

當校生徒之業追々相進候ニ随テ学用
器械入用ニ付當設置之器械ニ而ハ至テ僅少ニテ差
支居候折柄先般静岡藩雇教師米國
人クラーク當校ヘ出廻相成候者ニ而同人縣地ニ
テ相用候器械當今不用ニ相成居候趣ニ付テ
ハ右器械之内急々之寄ニテモ當校ニ借廻相成
候様仕度候右速ニ御辞決有之度候右
成下度此段御指令相伺候也

明治七年一月十二日

開成学校

律正順

畠山義成

田中文部少輔殿

伺之通

明治七年一月九日

文部少輔田中不二麻呂之印

追テ本文差急キ無之候ハヽ右之品ヲ相省キ
ニテモ右持拂ニ付其旨無之様致度此段申添候也

書面之趣静岡縣ヘ相達候事

明治七年一月十三日

文部少輔田中不二麿之印

大坂ニ在ル理学校化学器械当校ヘ御廻ニ
相成候ニ付先般右器械御渡トシテ長
田銀造出張為致候處別段ニ通同人
ヘ書面ヲ以申付有之候理学器械ノ儀差支
候条御会有之更ニ理学器械ノ外御廻
相成候様仕度候間右之趣御取計有之
学校ヘ其旨御通達有之度此段申進候也

明治七年一月十五日

開成学校

伴正順

畠山義成

田中文部少輔殿

東京開成學校

伺之通
但出張之人名并ニ發足日限等追テ可届出事

明治七年一月十七日

文部少輔田中不二麻呂之印

天文学従業所ニ設置ニ相成候ニ付右向入用之
物品横濱ニ而購求ニ係相伺候處器械
買上代價至而廉ニ而候得共下令ニ而右器械
横濱ニ罷在候外國商人ヘ預ケ置候處当月中ニ可引取旨申聞候ニ付
田中弘義及レビニエヲ以テ同地ニ出張為
致右品々代價為調可申ニ付
兩三日中右両名横濱ニ出張為致候様致
度候ニ付此段至急御指令相伺候也

明治七年一月十五日

開成学校
伴正順
畠山義成

田中文部少輔殿

田中文部少輔殿

追テ給料及ヒ旅費ノ儀ハ別途申立候
可申事ニ候也

伺之通
明治七年一月十八日

文部少輔田中不二麿之印

佛人レピシエ増給及ヒ再雇継伺

佛人レピシエ儀来七年十二月二十六日ヲ以テ
満期ニ付本年ニ至リ候テ文学教師ニ雇
採用ニ相成居候處右同國人マイヨ語芸学
校ヘ採用ニ相成候例ニ依リ辞職シ候前給料
一ヶ月金五拾圓増給致シ度尤本月ヨリ七年
ヨリ八年二月迄十四ヶ月間再雇継
致度此段相伺候条至急御指揮有之度候也

明治六年十二月十六日
開成学校
田中弘義
伴正順

田中文部少輔殿

筈ニ候開成学校ヘ依頼致シ可申候
得ハ同校ヨリ別段残写シ通申来候条右
今金五百圓ニ相廻シ可申候半テハ不本意ニ付
テ更ニ右金高丈下渡有之候ハヽ此段伺
速ニ御評決有之度候也

明治七年一月廿日

開成学校
津 正順
畠山義成

田中文部少輔殿

願之通
明治七年一月廿四日
印

官費生物品給與之儀ハ入舎ノ初メニ當リ衣服帽傘靴夜具ノ類悉皆一時相渡不申候半テハ校則ニ差響キ候儀出来不都合不少候ニ付新入ノ者有之候節ハ右ノ品々購求出来候様金額一時操越シ御渡相成度昨十二月中畠山義成參省ノ上申上候處月々入費ノ多寡ニ従ヒ入用之分差操御渡可相成趣御口達有之候ニ付月々御渡シ方割合等詳細取調申上候義ニ有之候然ル處右ノ振合ニテハ會計上繁雑ニ相渉リ候ニ付更ニ方法相立可伺出趣ニ候得共前条御口達ノ通御渡相成兼候上ハ別段豫備金トシテ新入舎生一

負ニ付凡ソ二十五圓ノ割合ヲ以テ人負ニ應シ御渡相成候様イタシ度候左候得ハ適宜流用ノ方法相立テ官費金贏餘ノ時ヲ待テ償却イタシ入舎ノ時ヨリ第二ヶ年目ノ末ニ至リ候得ハ全ク償却相濟迄ヨリ以後ハ月々定額ノ通拾圓ヲ以テ支給イタシ候儀出来可申候右両條ノ内御採用無之候テハ給養ノ方法相立候儀出来不申候条其邊御諒察ノ上迅速御評決有之度候也

明治七年一月廿一日

開成学校

伴正順

畠山義成

田中文部少輔殿

追テ最前差出候別紙給與物品目計表尚相添差出候也

書面之趣今般限リ金千圓可貸渡候條来ル七月ヲ期シ償還可致事

明治七年一月廿七日

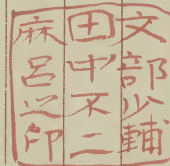
日耳曼ホルスタムニ於テエヅウアルド、クニツピングト申者取
集メ置候別段総計表之續拙者共前同人
為年々丹精ヲ以テ蒐集イタシ候品ニ可有之
仍而當校ヘハ買入ニ至候ハヽ万一可然旨ハ雇
教師シエンク申出候ニ付右者専ニ金石局設
置之義ハ許否未定ニ候得共折柄必用之品ニ
有之候条ハ買入方相成候様いたし度候右鑛
物代價二百元并本國ゟ運輸入費其外別
途ハ渡方未定ニ候得共但運輸入費之義ハ確ト
相分リ兼候得共大凡金三十圓位ハ相掛リ
可申由ニ有之候條至急何分之御決定有之
度候也

七年一月廿六日

開成学校　伴正順
畠山義成

田中文部少輔殿

伺之通
明治七年一月廿七日

文部少輔田中不二麻呂之印

先般語学校生徒寄宿舎旧静岡邸ヘ建築之義相伺置候処今般指令モ之有之候ニ付実地ノ形勢并後来之目途篤ト考案仕候処当校五学（法学　理学　諸芸学　鉱山学　工業学）ノ生徒已ニ二百五拾名ニ及ヒ日ニ進歩イタシ候ニ付テハ将来各学要スル所ノ製作試検場等追々造営不致候テハ不相叶且語学校生徒才ニ至リ門ノ科ニ登ルモノ漸次輩出スヘク到底五学科ヲ此一校ニ設置不致候テハ不都合ノミナラス校内狭隘別ニ造営ノ地モ無之候ニ付更ニ語学生徒寄宿舎建築之義ハ相廃止右費用ニ邸屋掛下ケ代価ヲ加ヘ後来

之目途學校ニシテ位置ヲ定メ先以專門一
校并各學科要スル所ノ試驗器械儀器等ヲ
外國ニ注文シ當校生徒ヲ移シテ之ニ宛テ
其中ニ於テ就學セシメ開成學校ヲ以テ
改メ外國語學校トシ生徒入舎為致候方
可然與存候且今般海外留學生一般
歸朝ト命セラレ候ニ付邦内ニテ學校一層盛大ニ入
無之テハ反テ學科進歩ノ路ヲ塞キ大ニ
教育上ニ關係致シ候儀ニ付從前之ニ附
與スル所ノ金額ヲ以テ專門學科更張ノ為ニ
注着ノ手立ニ及候ハヽ新校ノ建築教師
器械ノ費用等是ヨリ可相備且該校ニシテ
漸次盛大ニ相成候ハヽ自然ニ一校ヲ起シ

明年又一校ヲ造リ三校四校漸次築
造イタシ候テ四五年間ニシテ專門校全
備ノ日ニ至リ候ハヽ是該學科全ク各國ノ教
則ニ随ヒ教師生徒ノ人員ヲ定メ淘汰精
撰勉強従事スレハ本邦教育ノ事明
シテ可待ト存候間右等ノ旨篤ト御詮議ノ上速
カニ御評決相成候様致度此段相伺候
也

明治七年一月十三日

開成學校
伴正順
畠山義成

田中文部少輔殿

追而本文御評決相成候上ハ速ニ成功候様致度候
成候ニ付至急右語学校ニ於テ入用之もの
ニ而静岡郷内ニ建築相成候
イタシ候方至極便利ニ有之此段相伺候也
高田

伺之趣本郷ヘ專門學校建設之儀ハ追テ可相達候條先以旧靜岡邸内元寄宿合修理相加語學生徒寄宿可為致候事
但修理營繕之儀ハ本省會計課ヘ可打合事

明治七年一月廿七日

文部少輔田中不二麻呂之印

昨年五月二十三日在留外國教師傭入之節十五日間試檢トシテ相雇其學力行狀等取調候上本雇可致段御達有之仍テ爾後右御旨趣ヲ遵奉シ来候處其實際ニツキ往々不都合不尠如何トナレハ試檢相濟候上雇入條約相伺候ニ付其際數日間教師ヲ等閑ニ為相待且横濱在留等之者ハ雇入談判相調候共試檢ノ為メニ擧家ヲ移候儀モ不相成其上十五日間之試檢等ニテ迚モ其學力行狀確知イタシ候義難相調依テハ右試檢法ヲ廢シ更ニ最初雇入之節嘗テ其從事スル學校ノ免狀ヲ檢査シ又ハ其師第明

友ニ學力人物等ヲ尋問シ反覆丁寧ヲ以テ精
選イタシ候方却テ二三週間ノ試驗ヨリモ精覈
ナルヘク存候ニ付昨五月及ヒ九月両般ノ御達シ
御取消シ相成更ニ御雇入之始精選致シ候
様仕度此段至急御評決相成度候也

明治七年一月廿四日

開成学校
伴正順
畠山義成

田中文部少輔殿

申出之通可取計事
明治七年一月廿八日
印

別紙書面之書器并薬品之少気ヲ以
シテ教場必需之品ニ而買入ノ都合ニテハ
日課ニ差支不少右自定費金之内ヲ
以掛方ニ為出方ニ而右之代價惣金
弐拾壱圓四拾銭外洋銀五拾八元二拾
七セント別紙之通至急御渡有之度此段至急御届申上候
也

明治七年一月廿六日

開成学校
伴正順
畠山義成

田中文部少輔殿

伺之通

明治七年一月廿八日

一大レーゼブック　五十部
此代金三拾七圓五拾銭
但一冊ニ付七拾五銭

一アルコールランプ　貳拾
此代金拾圓
但一個ニ付五拾銭

一底見目鏡　貳拾
此代金六圓
但一個ニ付三拾銭

一シケン管　百本
此代金七圓五拾銭
但一本七銭五厘

一 堅種製 一分入瓶但廣細口　百本

此代金拾圓

但一本拾銭

一 同断製 半分入瓶但廣細口　五十本

此代金三圓

但一本ニ付六銭

一 一合入フラソコ　貳拾本

此代金三圓四拾銭

但一本ニ付七銭

一 大中小ガンキ　五本

此代金六圓貳拾五銭

但一本ニ付壹圓貳拾五銭

一 油鑪

此代金五圓貳拾五銭

但一本ニ付七拾五銭

一 火作リ小鋳物　貳拾組

此代金三拾二圓五拾銭

但壱組ニ付一圓六拾貳銭五厘

合金百貳拾壱圓四拾銭

一 流體ノ平均ヲ顕ス器

此代金拾二ドル

一 パイロメートル 金属ノ彭脹ヲ量ル器械

此代金五ドル

一 電氣用有髪ノ人頭

此代金一ドル五十セント

一廻轉鐘機械

此代金十五トル

一ヘリックス 針金ノ磁石カヲ物体ノ分賦スルカノ増シヲ顕ス器械

此代金十五トル

一ヒスポール 樟木ノ髄ニシテ作リタル球

此代金貳拾セン

一ジレクチンクロット 電氣器

此代金五トル

一ロットシフシエルラック 樹脂ノ棒

此代金二トル

一硝子棒

此代金一トル

一カルシユムクロライド

此代金五十セン

一パイロリグニアス

此代金二十五セン

一ホツタシユムナイトライト

此代金貳拾五セン

一ホッタシエムタイサルフエート

此代金貳十五セン

一アンモニーフノロライド

此代金貳十五セン

合五十八トル二拾セン

惣合 金百貳壹圓四拾戔
洋銀五拾八ドル貳拾セン

東京開成學校

當校定費金ノ儀増方之儀昨十二月中相
伺候處御許容無之ニ付而ハ事専ラ節省致
在候得共當校生徒之儀ハ何レモ篤学之
者ニ有之候ニ付入学之上書籍器械ハ勿論日課試
験用之薬品数ニ至ル迄高價ニ而多分
買入無之候而ハ難相成加之此節ヨリ入舎生凡
ソ九拾名モ増加イタシ候ニ随テ費用従前ニ不相當ニ
無之當是迄ニ定額金千圓之内凡ソ四百八拾
圓ハ傭人給料及圖書ハ小破営繕ヲ費用ニ
当テ向ケ無之儀有之候引除リ金四百貳拾圓ヲ以テ
書籍器什薬品ヨリ日用之炭薪小買物及池
病室費用并ニ拾四人餘之宿直賄料ニ至

是迄書籍支給イタシ来候處右様ニ相成候者
イタシ居候中ニ付引足不申甚迷惑ニ付
速ニ學校方伺出候處急需之物品買入并
筆紙墨等ノ費支候事ニ候得共右者當
一月ヨリ定費金千五百圓ツヽ御渡相成候
様致度此段相伺候急速御評決相願候
也

明治七年一月廿四日

開成学校
伴正順
畠山義成

田中文部少輔殿

書面定費金増額之儀ハ本省常額金
確定候迄先従前之通可相心得候事
明治七年一月廿八日

文部少輔田中不二麿之印

佛人レピシエ天文學教師ニ御採用ニ付昨年十二月廿七日ヨリ八年二月廿六日マテ御雇継之儀伺濟相成候處已ニ昨十二月ハ伺濟不相成候内過去候事故更ニ本月一日ヨリ本年十二月三十一日マテ一ヶ年間之御雇ニ相成候ノ可然儀ト存候間其旨教師ニモ爲談致シ候處右ニテ亙穀趣相呑候間前条之通ニテ條約取結候テハ如何可有之哉此段相伺候也

開成学校

明治七年一月廿四日

伴正順

畠山義成

田中文部少輔殿

追テ本文之儀ハ指令ニヨリ迅速條約取結可
申ニ付可成丈ケ速ニ御指揮有之度候也

伺之通
明治七年十一月廿九日

文部少輔田中不二麻呂之印

天文器械穿鑿ノタメ過日田中弘義并
レビシエ横濱表ヘ出張ノタメ夫々相頼置候処
當今同所ニ有合セ候品ヲ別紙之通ニ見
込ミ候条善向ヲ以テ至急御買入相成
度候ニ付テハ不日御成候様レビシエよりも申
出候ニ付此段相伺候代價之儀ハ不日追
而御伺可致候也

開成学校
伴正順
畠山義成

田中文部少輔殿

伺之通

明治七年一月廿九日

文部少輔田中不二麻呂之印

一シデラル時辰表　一　三之

一ルエギユラテウル時辰ノ一種　一　百五之

一同エレクトリック同　一　百廿五之、

一銀製コロノメートル同　一　九十五之乃至百十五之

一コロノメートルド、マルヰヌ　一　九十之

一尋常時辰表　一　弐十五之四十弐

一量日晷　一　六十之

一メタリック驗温器　一　十之

一航海暦　四　壱冊二之半

一歳事暦　三　壱冊弐之半

一運天圖　四十四

合金
凡ソ五百九拾四之九十銭

第一大學區
開成學校

去歳十二月中申出之物理學数學教
師米人パーソン米本國ニ於テ雇入之儀
別紙之通正院伺済相成候ニ付於其校教
頭モルレー氏ニ談議本國ヘ注文可致依テ條
約文案相渡此段相達候也

明治七年一月三十一日

文部卿木戸孝允

第一大學區開成學校ヘ外國教師壹
名御雇入之儀ニ付伺

第一大學區東京開成學校於テ数學ニ長
シ物理學ヲ兼候教師入用ニ付米本國於テ
右両學ニ熟達候者一名壹ヶ月給料大約
三百圓外ニ来案之通二ヶ年间御雇入相
成度尤旅費給料等ハ當省定額金之内
ヲ以テ相辨申候間至急御指揮有之候様
仕度此段相伺候也

明治六年十二月九日　文部少輔田中不二麻呂

右大臣岩倉具視殿

伺之通

明治七年一月廿八日

太政大臣三條實美印

日本国第一大學區東京開成學校ハ數學物理學教師トシ貴下ヲ雇入ニ付文部省長官某日本政府ニ代テ左之條ヲ約ス

第一條

今般貴下ヲ第一大學區東京開成学校何學教師トシテ二十四ケ月（日本到着之日ヨリ數フ）之間相雇フベシ

第二條

貴下江雇中居家一宇無賃ニテ貸渡スベシ破損等アル時ハ政府ニテ修理ヲ加フヘシ

但食料家具奴僕及厩舎等ハ一切貴下

之自費タルヘシ

第三條

貴下給料ハ日本国到着之日ヨリ一ケ月
ニ付日本金貨　ト定メ毎月末ニ相渡
スヘシ

但時ニヨリ各種之貨幣ヲ渡スドキハ
金貨ヲ元ニ立テ渡スヘシ

第四條

貴下發程前旅費トシテ金貨四百五十圓
相渡シ満期雇ヲ止ムル時ハ歸程旅費ト
シテ尚又四百五十圓相渡スヘシ

第五條

學校之諸規則授業時間及ヒ順序等ヲ
定ムル之權ハ其學校長ニアルベシ授業
ハ一日六時間ト相定ムヘシ

第六條

貴下建議之件々ハ都テ學校長某教頭
某ト談判ニ及ヒ其決定文部省長官之
指令ヲ受クヘシ

第七條

雇中一切商賣之筋ニ關係致スベカラス

第八條

日本政府ヨリ定ムル休日之外貴下随意
ニ業ヲ廢スルトキハ其日數之給料引去ル
ヘシ

第九條

雇滿期之後尚引續キ雇入ルヽ時ハ期限以前ニ其事ヲ示スヘシ

第十條

雇期限中日本政府ニ於テ不得已之事件有リ雇ヲ止ムル時ハ其翌日ヨリ後三ケ月分之給料並ニ歸程旅費相渡スヘシ貴下止ムヲ得サルノ事件アリテ自ラ解約ヲ請フトキハ其翌日ヨリ給料歸程旅費モ相サヽルヘシ

但シ日本政府ニ於テ雇ヲ止ルトキ期限前一ケ月又ハ二ケ月ナルトキハ其日数丈ヶ給料並歸程旅費ヲ渡スヘシ

第十一條

貴下其職ニ任ヘサル歟或ハ懶惰過失有之時ハ期限中ト雖モ雇ヲ止メ其翌日ヨリ給料並旅費モ渡サヽルヘシ

第十二條

期限中貴下病ニ罹リ十日ヲ過ルトキハ貴下自費ヲ以テ相當之代人ヲ出スヘシ二ケ月ヲ經テ尚愈ヘサレハ此條約ヲ廢シ其翌日ヨリ給料相渡サス歸程旅費ハ相渡スヘシ

但急症之病死或ハ變故アル節ハ直ニ在留之領事ニ引渡シ其翌日ヨリ雇ヲ止メ給料渡サヾルヘシ

年号月日

文部省長官某

日本国第一大學區東京開成學校何學教師トシテ御雇入ニ付テハ文部省長官ヨリ被相渡候條々ヲ承諾シ奉職スル旨ヲ左ニ證ス

第一條

日本国第一大學區東京開成學校何學教師トシテ二十四ヶ月（旧日本国到着ノ日ヨリ数フ）之間生徒教導勉勵致スヘシ

第二條

在任中居家一宇御貸渡相成破損之アル時ハ政府ニ於テ修理致サルヘシ

但食料家具奴僕及ヒ厩舎等ハ一切自費ヲ以テ相辨スヘシ

第三條

何国人

何某

貴下

給料ハ日本國到着之日ヨリ一ヶ月ニ付日本
金貨ト定メ毎月末ニ受取ルヘシ
但各種ノ貨幣御渡之節ハ金貨ヲ元ニ立
テ受取ルベシ

第四條

發程之前旅費トシテ金貨四百五拾圓受
取リ満期御雇止メ之節ハ歸程旅費トシテ
金貨四百五十圓受取ルヘシ

第五條

學校之諸規則授業時限及ヒ順序等ヲ定ム
ル之事ハ學校長之指揮ニ従フベシ授業ハ
一日六時間ト相定ムヘシ

第六條

建議之件々都而學校長某教頭某ト
談判ニ及其決定ハ文部省長官之指
令ヲ待ツヘシ

第七條

在任中ハ決シテ商賣之筋ニ關係致サ
ヽルベシ

第九條

在任満期之後尚引續キ御雇入之節ハ期
限以前ニ其事ヲ示サルベシ

第十條

在任期限中日本政府ニ於テ不得止ノ事
件之アリ此ノ約ヲ解ク時ハ其翌日ヨリ後
三ヶ月分之給料并歸程旅費ヲ受取ル

べし自己止ムヲ得サル之事件アリテ解約ヲ請フ時ハ其翌日ヨリ給料歸程旅費受取ラサルベシ

但日本政府ニ於テ雇ヲ止ムル片ハ期限前一ヶ月又ハ二ヶ月ナル片ハ其日數丈之給料并歸程旅費ヲ受取ルヘシ

第十一條

期限中其職ニ任ヘサル歟或ハ懶惰過失有之時ハ此約ヲ解キ其翌日ヨリ給料并歸程旅費ヲ受取ラサルヘシ

第十二條

期限中病ニ罹リ十日ヲ過ル時ハ自費ヲ以テ相當之代人ヲ出スベシ二ヶ月ヲ經テ尚愈ヘサレハ此條約ヲ廢シ其翌日ヨリ給料受取ラス歸程旅費ハ受取ルヘシ

但急症之病死或ハ變故アル節ハ直ニ在留之領事ニ御引渡之アルベク其翌日ヨリ雇ヲ止メ給料受取ラサルヘシ

何国人

何某

年号月日

文部省長官

閣下

明治七年一月十八日

開成学校

畠山義成

伴正順

木戸文部卿殿

追而当日中要子受取候ニ付右条々之
中ニ有之候目録之義者至急ニ而翻訳出来兼
候間元書ニ而差出候也

昨年十二月中及指令候残金千弐百五拾圓
可相渡別紙新規買入書器目録ハ差戻
候條尚品價明細取調譯書ヲ添更ニ可
伺出事

明治七年一月三十一日　印

別紙書面之書籍并図法階梯教授
必需之書ニ有之候処當年同課ニ
差支候ニ付目定費金之内ヲ以テ掛
方ニ而買入候ニ付代金四拾三圓別途
御渡方有之度此段至急御伺候也

明治七年一月廿九日

開成学校

伴正順

畠山義成

木戸文部卿殿

一ケミストリー（ミル）　三冊物壹部
此代金拾八圓也
一圖法階梯　第八號
摺共製本一式五百冊
但シ壹冊ニ付五錢ツヽ
此代金貳拾五圓
合金四拾三圓
右之通有之候也

書面書籍代其外別途渡金之儀者
難聞届候條其校定費金之内ヨリ以テ
差繰買入方可取計候事
東京開成學校

天文器械購求之儀伺之通ニ付來ル二月
二日右器械買入之為メ田中弘義并
レピニ并ニ山田清三郎横濱表ヘ出張為
致度候ニ付此段相伺候旅費之儀ハ
別途御渡有之度候也

明治七年一月三十日

開成學校

伴正順

畠山義成

木戸文部卿殿

追テ本文差急キ候ニ付太政官ヘ御指
令有之度候也

明治七年二月二日

伺之通
明治七年二月二日

英両仏國ヨリ注文ニ成居候器械横濱
表ヘ来着いたし候ニ付右器械請取トシテ
明三日池田謙之出張為致度此段相伺
候尤旅費之儀ハ別途御渡可被成下候也

明治七年二月二日
開成学校
伴正順 印
畠山義成

木戸文部卿殿

追テ本文器械之儀ハ運上所役所ヨリ外ニ持
出シ候上ハ破損等之儀有之候而モ談判致シ兼候ハ規則ニ

居候ニ付当分右器械修復ニ及ヒ候内破損ノ
有之候得者補中致シ仍テ大ニ差急キ候ニ付
検査有之候様致度候ニ付伺出指令有之度候也

伺之通
明治七年二月二日

文部大輔木戸孝允之印

天文学修業所ハ加州邸内ヘ新築造立ニ而右
成学校ヘ設置之場所別紙図面之地北方
ニ池有之候処南涯中央ニ望遠鏡ヲ置
キ池ノ北涯ニ目標ヲ建テ天象ヲ窺ヒ見候
儀ニ有之地ヲ除キ候得ハ狭隘ニテ不都合
候間別紙朱引池共右之場所ヘ操込ノ
度候条此段相伺候急々御指揮ノ上御下知被成度
候也

開成学校
伴正順
畠山義成

木戸文部卿殿

伺之通
明治七年二月三日
文部卿木戸孝允之印

天文書器佛國へ御注文之儀伺

天文學教場ニ設置ニ付テハ試驗器械等之甚タ乏シク候條就テハ別紙目録之書器差向必需ニ有之候間至速佛國へ御注文相成候様仕度仍テ此段相伺候条至急御指揮有之度候也

開成学校

七年一月廿六日

伴正順
畠山義成

田中文部少輔殿

追テ本文書器代價之義ハ別途差上候ニ有之度候此段相伺候也

伺之趣前途有用之分ハ姑ク閣キ
現今必需之品ノミ更ニ取調可伺出
事

明治七年二月三日

文部卿
木戸孝
允印

語學校生徒寄宿舎旧静岡邸ヘ築
造之儀ヲ廢シ更ニ右邸屋代掛下代價
ヲ費用ニ相加ヘ専門一校并各學要スル所
ノ試驗製造場等ヲ加州邸ニ建築シ当
校生徒ヲ移シ開成學校ヲ以テ外國語
學校トシ其方の利益ニ可有之且其實
ヲ詮議シ先般相伺置候先ノ旧静岡邸
ヘ元寄宿舎修理相加ヘ語學生徒寄宿
可為致候所指揮ニ趣向有之候此段ニ
而指揮ニ適シテハ病室設置之場所等
ニ且同邸之義ハ既ニ未来屋中ニ為追
来ト學舎ニ為メニ設置之志ニ候ヘハ加寛

厰博房徒ラニ廣濶ノミニテ其室タル唯
ヲ捨テ呪ヲ取リ候得ハ殆ト二百人ノ生員ヲ
容レ充塞ヲ致シ有何分舎室ニ適當不
致候仍テ先般以来ノ目途ヲ考案致
シ上申仕候次第ニテ假令ハ数百ノ千
圓ノ費用ヲ擲チ僅些ヲ加ヘ一同生徒ヲ容
レ候ヘトモ聊不完全ニシテ不得已候而右
邸屋僧侶ニ候ト雖且今来同邸中掛
下ミ上右跡ヘ病室建築イタシ当分当校
及ヒ語学校ニテ両用仕居候而當門一校并試
招黙塲等ヲ加ヘ右邸内ニ築造いたし候ハ一
挙ニシテ切ヲ除ヘ更ニ兼築ニ労ヲ省キ又
費ヲ為節ト存候間従前之詮議ヲ以テ仍
テ此段奉應御伺候也

明治七年一月廿九日

伴正順

畠山義成

木戸文部卿殿

伺之趣猶詮議ノ次第有之候間最前相達候通舊静岡邸ヘ修理相加學生徒寄宿舎ニ可相用事

但病室建築之儀ハ尚取調可伺出事

明治七年二月三日

文部卿木戸孝允之印

東京開成學校

過日差出候製作学校教則不都合之廉有之候間別冊之通釐正いたし候間前差出候方与御引替有之度依テ別冊差添此段申上候也

明治七年一月廿五日

開成学校

伴正順

畠山義成

田中文部少輔殿

伺之通

但名唱之儀ハ製作學教場ト相稱

朱書之通リ改正可致事

明治七年二月三日

印

東京開成學校

製作學教場教則

東京開成學校

製作學教場教則

條例

第一條 此教場ハ諸般ノ工職物品製造等各自共ニ志ス所ニヨツテ直チニ其事ニ就キ專ラ實地術業ヲ學バシム

第二條 入場ノ生徒ハ專ラ術業ヲ研究スト雖化學物理學數學等ノ學ハ製作學ノ基本タルヲ以テ之ヲ豫科トシテ其大畧ヲ學バザルヲ得ザルナリ

第三條 製作学ヲ分テ工作製煉ノ二科トス入場ノ生徒ハ其志ス所ニ随テ其科ニ入ルヲ得ベシ

第四條 入場ノ生徒ハ期限四年トシ豫科三

級ヲ二年間本科一級ヲ二年間ニ卒業スルノ目的アルベシ

但豫科三級ハ各七ケ月ノ課程トシ本科一級ハ二ケ年ノ課程トス

第五條 生徒毎級ノ終リ試業ヲ經テ登級ヲ許スヘシ

教則日課

製煉生徒

豫科第三級　毎週

科目	時間
物理学	六時
無機性化学	六時
化学用算	三時
物理用算	三時
化学復講	三時
物理復講	三時
算術	六時

豫科第二級　毎週

科目	時間
物理学	六時
代數	六時

豫科第三級　毎週

科目	時間
物理学	六時
無機性化學	六時
化學用算	三時
物理用算	三時
化學復講	三時
物理復講	三時
算術	六時

豫科第二級　毎週

科目	時間
物理学	六時
代數	六時

有機性化学　六時　工場使用　六時
物理復講　三時　物理復講　三時
化學分析　六時　圖学　三時
化学復講　三時　幾何　六時

豫科第一級　　豫科第一級
分析試驗　毎日五時　重学　毎日一時
本科一級　　工場使用　毎日四時
百工化学　毎日五時　本科一級　物品製造　毎日五時

明治七年一月廿四日　製作学教場

天文學教師レビシユ居館ニ付テ文学
教場ヲ開キ候ニ就テハ旧金澤邸内
ニ於テ一宇御貸渡相成度右者過日申上之
趣モ有之通同邸ハ至極便宜ニ付東校生
徒ヲ移シ候ニ付且其師レビシユ儀モ同様移轉
致為致度候間右ニ就テ右文部省ニ掛
御聞合相成候様いたし度此段及御
届候也

開成学校
畠山義成
伴正順

木戸文部卿殿

伺之趣レビシエ居館之儀ハ旧金澤邸内ニ於テ三番館一宇貸渡可申候事

明治七年二月四日

文部卿木戸孝允之印

製化教場ニ付本月中中旬頃開場ニ至迄右教場竣功候ニ付二人獨逸生徒寄宿舎二階相目仕切ニて床等ニ有之候ニ付而別紙仕法書繪圖面之通リ根柱并カラス窓コワレ不足ノ諸所障子代替其速修繕出来候様仕度此段相伺候也

開成学校

明治七年二月二日

伴正順

畠山義成

木戸文部卿殿

追テ本文ニ入費ノ儀ハ猶別紙ヲ以テ相伺候也

伺之趣於本省處分可致候條會計ヘ打合可申事

明治七年二月四日

文部卿 木戸孝允 印

天文学教場語学教師雇入之儀ニ付伺

天文学授業即今相開ニ至リ度レピシエ儀ハ専ラ高等数学并天文実地試検等ヲ授ケ候様ニ致シ度然ルニ右生徒語学未熟ニテ更ニ語学教師一人ヲ備ヘ成語学及ビ数学ヲ教ヘ教授致サセ候ハハ語学ニテハ難相成且レピシエヨリモ申出候ニ付今般天文学教場語学教師トシテ一ヶ月金百五拾円ノ給料并一ヶ年ヲ期限ヲ以テ壹人雇入相成候様致度右雇入ニ付許可相成候上ハ人物精選致シ伺置候事ニ早速相撰差出度候也

東京開成学校

明治七年一月三十日

伴正順

畠山義成

木戸文部卿殿

伺之趣難聞届候事

明治七年二月四日

文部卿木戸孝允印

先般大坂開明学校ヨリ理化学器械取寄ニ付右荷造郵船賃等凡ソ見込ヲ以金五百圓取渡シ方朱書之[illegible]之儀ニ通リ趣[illegible]ニテハ東京相来リ候条即今金五百圓前途出渡相成度此段至急相伺候也

開成学校長

伴正順

畠山義成

明治七年二月三日

木戸文部卿殿

伺之通

理化学器械御寄附相成候荷造入費及
郵船賃等凡見込高金五百圓程相掛候義ニ
付未タ該品運ヒ及ヒ仕拂合無之候得共前書之通
無之ニ付テハ器械荷造ノ稍ニ半方分来ニ近ク
追テ廻送ニ可相成候ニ付予テ運ヒ申度候此
通右入費操替之儀何分御差支且五百圓ニテ
必然可足不申見込ニ付是丈ケ余金千圓至
急御廻シ相成度更ニ仕候及ヒ拂合候也

明治七年一月廿九日

大坂開明学校長
奥山政敬

東京開成学校長
畠山義成殿
伴正順殿

但精算仕譯帳追テ可差出事

明治七年二月五日

明治七年二月六日

伴正順
畠山義成

木戸文部卿殿

書面之趣金五百圓者別途可下渡候條
仕拂之上清算帳可差出尤モ定費取極
メ之儀ハ不遠可相達候事

明治七年二月五日

文部卿木戸孝允之印

過般舊加賀邸内明キ長屋修繕ニ加ヘ
天文假数学教場及ヒ生徒ヘ寄宿舎ニ相
用候儀伺済ニ相成不日修繕出来候上ハ東京
学居明キモ屋ニ候ヲ被渡シニ付修繕モ容易
ニ可相成ニ付何レ右遅速ハ難計其際
徒ラニ生徒ヲ曠日休業セシメ候ハ如何ニモ遺憾ニ
存且入費ハ相嵩ミ可申ニ付自今ヨリ同邸中
當分医学校ヘ御貸渡相成度尤モ同
所モ破損モ少ナク且廣闊ニシテ萬端
都合モ宜シク候間右長屋ヨリ相用ヒ得ハ
入費モ省ク出来モ速ナルヘク存候間右
御許可相成候ハヽ長屋ハ引続キ申度此段相伺

学校ニ相渡ニ相成候様仕度此段至急此
指揮相願候也

開成学校
天文学教授手務掛
田中弘義

学校長
畠山義成

木戸文部卿殿

追テ本文之件容相成候ハヽ右建ニ修繕相加ヘ天文
但数学教授及ヒ生徒寄宿舎ニ相用可申候条
此段とも申上候也

願之通

但修繕之儀ハ先般相達候通可心得事

明治七年二月十二日

文部卿木戸孝允印

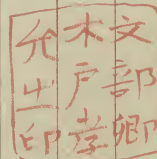
米國人
グリフイス

右ハ去ル十六日ニテ満期ニ付雇止ノ所右者
當方先般英國ニ而注文致シ候専門学
校教師未着船遅延ニ付本人儀更ニ六ヶ月
尚雇續談判ノ所無據筋ニ付承諾仕候処
同談いたし候ニ付本月十七日ヨリ来ル八月十六日
迄六ヶ月當壹ヶ月金三百三拾圓之給料ヲ
以テ右雇ト改テ約定取結度此段相伺候ニ付御指
令有成度存候也

明治七年二月十二日

開成学校
畠山義成

先般蕉辭醫師御抱入相成右跡ヘ病
室築造いたし當分右校及ヒ語学校ヨ
相用候ニハ方便利ニ付更ニ専門一
校并試驗製作場舊加州邸内ニ築造致
度段相伺候處御許議ニ相成候ニ付官
ニテ通蕉静醫師ニ修理相加語学生
徒寄宿舎ニ而相用且病室建築之儀ハ
尚方相伺而御座候處情合ニ相成候ニ付仍
而病室築造ニ場所ヲトシ候ニ蕉静醫
師ヲ除キ候ヘハ當校構近ニ地ニ於テハ四
丸醫師ニ過クルニ場所無之候ニ付同師ニ
病室建築致シ度候間御聞届有之度

伺之通
但雇継約之上條約書和洋文各二通可
差出事
明治七年十二月十四日

此旨奉伺候也

明治七年二月四日

開成學校
畠山義成

木戸文部卿殿

伺之通

明治七年二月十五日

文部卿木戸孝允印

昨年中元當校教師米人ウエルベッキ正院
ヘ御雇入ニ相成ニ付是迄之在職ヲ三ヶ月
分其侭賞与候様昨十二月十日伺達置
候處引續キ在候得共是迄已ニ相
達シ月限モ相過候ニ付右引拂候儀
ニ而已ニ殘ニ相成候右引拂前日限迄相違置
候様仕度此段申上候也

明治七年二月九日

開成學校
畠山義成

木戸文部卿殿

申出之趣引拂前日限可相達事

今般天文学教場取設立相成候ニ付而者器
械其他一切之諸器遅々御備可相成儀ニ付
入費之儀者別紙定費ニ而ハ極而相成度且
不日開場可致旨相聞候其他教師ニ付
約束不致候ニ付支候ニ付而者
細之分ハ御取候ニ付時日を費し開業之
運ニ至り兼候事ニ付即今金五万円御下
渡し相成候様いたし度此段相伺候也

七年二月十日

開成学校長
畠山義成

木戸文部卿殿

明治七年二月十七日

書面之趣金五百圓ハ別途可下渡候條精々省畧遣拂之上清算帳可差出候事

明治七年二月十七日 文部卿木戸孝允印

先般天文學教師レピシエ居宅之儀ニ付金
澤卿内ニ於テ一宇御買渡之義申伺候処
同卿内ニ於テ三百圓被買渡可申旨御指
令ニ至テ然ルニ右般同卿所有長屋數學教
場及ニ生徒寄宿舎ニ而右用ニ而醫學校へ
御貸渡相成居長屋ト御引当ニ候既ニ當
相成候ニ付自分ヲ同所ニ而當分被差置候ハ右門前
其長屋ト接近致シ居候ニ付教場へ往復
等之都合モ宜ト存候間過日中渡相成
其三百圓被下置候ト位右之三百圓被下置候ニ付御買
渡相成候様仕度右モレピシエ分モ申出候
ニ付右支拂ハ差支ノ儀ソハ急ニ引当ニ候

御許容相成候様仕度此段御達旁御指揮相伺候也

明治七年二月十三日

開成学校
畠山義成

木戸文部卿殿

願之通

明治七年二月十八日

文部卿木戸孝允之印

米國人バーソン數学教師トシテ本國ニ於テ約文ヲ以傭當校ヨリモルレール談判ヲ依
頼致置候處達ニ付モルレー氏ニ及談判候處
條約別紙之通ニ而雇入相成且同人給料
ハ壹ヶ月六百三十圓ニ而雇入之事ニ致
同人学力他ノ教師ニ比較シ候ヘハ右給料
一ヶ月金三百三十五圓ニテ其節モルレー
ヨリ申出置候ニ付別紙條約ノ外同
人旅費金四百五拾圓相渡度候間右
速ニ御指令相成度候也

明治七年二月十九日

開成学校
辻新次

木戸文部卿殿

伺之通
但旅費金之儀ハ本日可下渡候條請
取之者可差出事

明治七年二月廿日

文部卿木戸孝允印

東京開成學校

過般天文学教場ニ於テ当分之処外国教
師ヲ一名ヲ限リ生徒モ僅員ニ相成候ニ付追
相成候ニ付天文学教授之儀ヲ先般
候教科目ニ通シ候処已ニ勝多ニ学科教
師一員ニテハ受持候段ハ分課難行届候ニ付
更ニ天文学教場文学教師一人一ヶ月給
料百五拾円乃至二百円ヲ以テ雇入相成
候様仕度此段至急御指令相伺候也

開成学校

明治七年二月十七日

出浦力雄

三穂健道

木戸文部卿殿

東京開成學校

伺之趣難聞届候事

明治七年二月廿四日

文部卿木戸孝允之印

一理事功程

右於當校入用有之即今上木之分至急御廻し有之度此段申上候也

明治七年二月廿四日

開成學校

辻新次

木戸文部卿殿

書面聞届候條本省報告課ヨリ可請取事

天文書晃佛國語文ヲ以テ伺

去ル一月廿六日天文書英佛國ト共語文ヲ以テ相設無目録相添伺出置候處右ハ前途ヨリ用ニ分ハ姑ク閣キ現今必需ノ品ノミニ更ニ補ヒ伺出候様指令有之候得共目録中ニ於テ捨難キ別段目録ニ通ニ及ヒ此ニ於テ是ハ九十天文學ニ於テ離缺者ニ可有之迅速御渡相成候様仕度此段更ニ奉伺候

伺之通

明治七年二月十日

開成学校

畠山義成

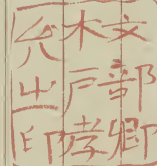
木戸文部卿殿

追テ本文伺濟ノ上ハ教師ヘ也ヲ下シ回學ス

明治七年二月廿四日

文部卿木戸孝允之印

去ル仏國巴理府天文臺ニ於テ天文師
イブヲン、ビヤルツード申者ヘ委托嘱求いたし
將右器械モ買ニ入リ且價モ廉ニ有之旨レピ
シエより申出候旨本省ヨリ同國在留公使
ヘ買入之儀ヲビヤルツー氏ヘ相談之上取計
様相達置候ニ付此段及候也

書面器械代之儀ハ今般校費改定ニ付テハ其校常費之内ヲ以適宜ニ處分可致事

明治七年二月廿七日

文部卿木戸孝允印

昨年中工部省ヘ相雇替相成候當校教
師学人グレーフェン氏當校ヘ当分譲受
ト度旨申出候処右者當校ヨリ同
省并本人ヘ遂示談指支無之ニ付テ其
本省ヨリ可及掛合旨相達有之本人ヘ示談
仕候処工部省ニ而ハ本月限リ雇止相
成候旨右年季満ニ付テハ来ル二月
二日ヨリ八年二月一日迄壹ケ年間相雇以当
校教学教師トシテ一ケ月金弐百五拾圓
ニ給料ニテ相雇入和約相結候積ニ付和
同之条至急御指令有之度此段相伺候也
一月成以前相移

明治七年一月廿七日
伴正順
畠山義成

木戸文部卿殿

書面傭入之儀聞届候條期限ノ儀ハ
先以六ヶ月間ト取極メ結約可致候事
但結約ノ上日限等届出且條約書面
写和独文各二通可差出事

明治七年二月廿八日

文部卿木戸孝允之印

語藝学校生徒次第ニ進歩候ニ随テ課
業相増候ニ付即今教師而已ニテハ授業不
充分ニ付自然教師壱人相増度兼テ目的も
不相成候ニ付幸在朝佛人リエウトアル右仏
國ファキュルテ、ド、ワールーズ、学校ニ於テバッシリエ
エス、シアンス、ノ免状ヲ受学力モ充分ニ有之
壱ヶ月金弐百圓乃至弐百五拾圓給料ヲ以
文学及数学教師トシテ新規雇入相
成度候右御許容ニ相成候ハヽ雇入期限等尚
去ル廿二日相伺候条此段至急御評決之
上御指揮有之度此段相伺候也

開成学校

七年一月廿四日

田中文部少輔殿　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　付　畠山義成

書面雇入之儀聞届候條給料期限等
談判相遂候上可届出候事
但結約之上條約書写和佛文各
二通可差出事

明治七年三月三日

印

米國人マツカーデ増給及ヒ雇継伺

米國人
マツカーデ

七年三月廿八日ヨリ
八年三月廿七日マテ

一ケ年間　給料一ケ月金三百圓
但従前給料百五拾圓之處更ニ五拾円増

右マツカーデ儀ハ曽テ支那ニ於テ領事官
相勤候者ニテ教師中尤モ行狀正シク且学
力有之法律学ニ長シ教授方至テ懇切ニテ
生徒モ服従イタシ如斯教師ハ假令本國ヘ
御注文相成候テモ容易ニ難得人物ニ有之
候然ルニ来ル三月廿七日満期可相成處前
条之人物ニ付實ニ可惜者ニ御座候且生徒ヲ
奨勵シ其進歩ヲ迅速ナラシメ候之徴顕

然有之者ニ付テハ是迄専門学中諸科ヲ
兼子教授イタシ居候處法律学長技之義
ニ付更ニ右學專務教授為致度候間前
書之通御増給之上一ヶ年間御雇継相
成候様仕度此段迅速御指揮相伺候也

開成学校

明治七年一月十七日

伴正順
畠山義成

田中文部少輔殿

伺之趣聞届候條従前雇満期限一旦
旧條約ヲ廃シ更ニ條約可取結事
但結約之上條約書写和英文各
二通可差出事

明治七年二月四日（印）

先般伺済相成候製作学教場教則
上木ニ付生徒ヘ相渡候様仕度ニ付
別紙教則書添指出候間至急御許
相成度此段相伺候也

開成学校
辻新次

明治七年二月廿三日

木戸文部卿殿

伺之通
但上木ノ上五部可差出事

東京開成學校

米國人

アンサンク

明治七年三月七日ヨリ
同九月六日マテ

六ヶ月　給料一ヶ月金二百五拾圓

右者昨年十二月中英獨生徒ヲ兼子教授致
候畫学教師壱人御雇入之儀伺済ニ付
選以來候處何分右学業修之者見當不
申然ルニ英生徒之方者即今教師差支無之
候ニ付前書之人物畫学ニ長シ免状所持
致し居且行状正しき者ニ付右教職モ兼
ル氏ヨリモ相談以來候此度御雇入相成
候尤同氏ニ者畫学并測量学教師
トシテ前書之通御雇入相成度尤給料
月俸とも當校定費之内ヨリ以テ相弁シ可申候

明治七年三月四日

印

復至速ニ可指令有之候也

明治七年二月廿六日　辻新次

木戸文部卿殿

追テ独乙畫学教師雇入之義も至急ニ御聞届ニ相成候様致度候也

伺之通
但結約之上條約書和英文寫各二通可差出事

明治七年三月五日

文部卿木戸孝允印

米國人　ウエーダル

明治七年四月廿七日ヨリ
同九年四月廿六日迄

但シ旧歴明治四年三月十二日ヨリ向三ヶ年間ノ雇同七年三月十一日満期即チ新歴四月廿六日ナリ

二ヶ年間　従前給料一ヶ月三百之ト五拾円
之所改テ金三百五拾圓

右ハ来ル四月廿六日満期ニ付是迄学術言行共相並不能ク生徒ヲ教導シ其者ニ自前書之通ノ雇継相成候ハヽ且同人儀ハ幸未ニ二ヶ年ノ備入ニ相成候以来院ニ三ヶ年来當教授ニ盡力いたし生徒本日ニ進歩ニ至り候も與リて功労不少候ニ付今般ノ雇継相成候一ハ前後合テ五ヶ年ニ及ニ付雇ニ相成候間満期ノ節同國ニ旅費賜リ候様いたし度此段相伺候条至急

急ニ治療ニ不及趣ニ相成候也

明治七年二月十七日

開成学校長

畠山義成代理

出浦力雄

三穂健道

木戸文部卿殿

書面傭継之儀ハ聞届候得共賞誉トシテ帰航旅費前以取極置候儀ハ難聞届候事

但傭継結約之上條約和洋文写各二通可差出事

明治七年三月五日

印

ゼーケル代教師

数学教師壱人

右ハ去ル六年六月七日普國ト約定文

英人

法学教師壱人

右ハ去ル六年六月廿五日英國ト約定文

佛人

諸芸学数学教師壱人

右ハ去ル六年六月廿五日佛國ト約定文

米人

数学物理学教師パーロン

右圖面ヲ首尾相成候ハヽ其段御届可申
上試験所築造ニ取掛リ度此段申上候以
為此段相伺候也

明治七年二月廿八日

開成学校長　辻新次

木戸文部卿殿

伺之趣試験所築造之儀ハ本省会計課ニ於テ處分可致候條同課ヘ可打合事

明治七年三月九日

文部卿木戸孝允印

官費生規則第十六章官費生徒在校期年中ハ官員ニ登用スルヿヲ得ストアリ右ハ生徒ヲシテ半途廢学スル勿カラシメ以テ学業ヲ成達セシメ其学術ヲ実地ニ施行シ以テ一般公用ニ供セシノ御旨趣ニ出ツ然ル方今人材成育最モ急需ニ際シ苟モ一技一能ニ通達スル者アル之ヲ登用シ以テ後進ヲ教授セシメサル可カラス今官費生ニシテ学力抜群ニ若アルモ従学期年中之ヲ登用スレハ規則ニ抵觸スルノ患アリト雖モ之ヲ挙ケサレハ後進影多ノ生徒ヲ教育スル能ハス寧ロ規則ニ抵觸スルモ挙用シテ以テ教育ヲ擴張

スルニ若カラド存候況ヤ今人材缺乏ノ秋
生徒ノ中学力優等ニ者ヲ挙ケサレハ他ニ
求ムヘキモノナカランニ仍テハ半途廃学ヲ許
サヽルモ到底人材ヲ成達スルノ旨趣ニ有之一人ヲ
挙ケテ数十人ノ学業ヲ賛成スルノ儀合ニ至
ラハ官費生　校期年中ニ候トモ其中優ナ
ル者ヲ経革シ教員ナドニ授教イタサセヤウ度
左程迄撰リニ登用イタシ候訳ニハ決シテ無之
全ク不得止儀合ノミニ挙用イタシ候儀ニ付此
段御許可相成度候条至急御指令相
成度候也

明治七年三月十二日

開成学校臨時学校掛
辻新次

木戸文部卿殿

書面之趣難聞届候事

明治七年三月十五日

文部卿木戸孝允之印

雇人グレーフェン儀山學校數學教授トシテ
一ヶ月給料金弐百五拾圓ヲ以テ来ル二月
二日ヨリ向一ヶ年省内雇入ニ致シ去ル一月二十七
日伺済ニ雇入ニ付テハ此節右約定取結
ヒ先以六ヶ月間ト取極メ結約取替候ニ付
合候處右グレーフェン儀ハ去年當省へ
雇入来候處學力人物等洋書教授モ
其省ニテ即ち我邦ニ在留ノモノニ於テ稀ナル
モノニ付當省隠ニ雇入方モ厚ク取扱候ニ付テハ
乍去右ニ不係一般名山義成ト
期限一ヶ年間ニテ給料弐百五拾圓ヲ以雇入
可申義談済ニ付右伺之通今更取計

前之居館可請取事

明治七年三月十四日

文部卿木戸孝允之印

東京醫學校

其校ニ雇教授ホルツ居館之儀本郷八番教師館ヘ移轉爲致候旨並ニ右道置候處開成學校教授壹名即今本國ゟ來航之者有之ニ付テハ從前ホルツ居館貸渡不申テハ不相成候條同人儀ハ急〻引拂方探通ニ談判相遂可申此段再應相達候事

明治七年三月十四日

文部卿木戸孝允

當校病室建築之儀先般伺置候処
于今御指令無之然ルニ酷寒之候ニ向ヒ
生徒患者多ク有之當今之病室ニテハ陋
隘不潔ニ而却テ健康ヲ害シ候者不過何卒
速御評決之上建築御許可相成候
様急ニ爲又申上候也

明治二年十二月廿三日

同成学校

伴　正順

畠山　義成

田中文部少輔殿

東京開成學校

伺之趣詮議ノ次第有之難聞届候事

明治七年三月廿日

先般英國ヘ御注文ニ相成候器械横濱ニ到着候ニ付早速受取人可差出旨同所より報告有之候ニ付左之人名之者ニ而廿四日受取トシテ差出申度此段至急相伺候也

少録 村山久

器械掛出雇 [?]

開成学校七等 三原親長

明治七年三月廿二日 辻新次

木戸文部卿殿

伺之通

明治七年三月廿四日　文部卿木戸孝允之印

臨時御用或ハ從前海外ヨリ注文等之書
籍横濱港ヘ着いたし候節同港ヘ外國教
員并當校教員吏員等出張爲致候節
ハ旅費及ヒ出張之節前以伺ヲ經候上爲
相渡シ當日御届可仕筈之處今般當校定
額金御定之上ハ都テ右ニ係る費自今校費ヨリ以テ
同港ヘ出張爲致候節ハ別段不經伺
御届而已差出申度候条此段奉伺候也

開成学校長

木戸文部卿殿　辻新次

依御用横濱ヘ出張爲致候節往復届之

議自今於其校毎一月取經翌月二日可差出事

明治七年三月廿五日

文部卿木戸孝允

昨六年十二月中東京外国語学校生徒之内工業学校ヘ轉業之者生徒並右教師並ニ右同校雇教師ワイラル、ジヨンストン之両名借用授業為致候處即今同校生徒増員授教上差閊候ニ付戻シ呉候様申来候然ルニ右ワイラル儀ハ教授向之様相成候ニ付同校ヘ返シ申候ジヨンストン儀ハ当年未国ヘ帰国致度旨申立候工業学教師未熟之者ハ教授向不同候間本年三月下旬之都合旧保約面ニヨリテ来ル十月廿日迄當校ヘ再雇置申度尤モ給料等ハ當校定額金之内ヲ以テ

右辨之向ニ付条件相済候迄至急御指令有之度
存候也

明治七年二月廿六日

開成学校
辻新次

木戸文部卿殿

伺之通
明治七年三月廿九日

昨六年五月中獨乙本國ヘ約定文ニテ教授来
朝候獨逸人ビーゲル儀当雇入相成然ル処今般
獨逸人ウエストスハール来朝ニ付右ヘ引替雇止ノ
申合然ルニ同人儀専ラ普請場ニテ監督等熟知
不致且又十分ナラス学力モ判然不致獨立教授致
難候テハ甚不都合ニ付即チセーゲル儀相助ケ参リ候テハ
揚約授業ニ差支候ニ付無據セーゲル儀
来五月十八日迄教ニ従事ス之通ニテ雇置度
尤右期限ニ至リ候ハハ速ニ雇止ノ事ニ致
条件候間至急御指令有之度相伺候也

明治七年二月廿四日

開成学校
辻新次

木戸文部卿殿

書面之趣不條理ニ候條ゲーゲル儀ハ
癸酉五月中伺出之通解約可致事

明治七年三月三十一日

文部卿木戸孝允之印

今般當校医局詰牧山脩卿殿湯治願
済ニ付上州ヨリ九日ヨリ草津ヘ發足いたし
候此段生徒患者多ク差支ニ付本
人ヨリ京近ニ當東京医学校ヘ医員之内
一名毎日午前八時ヨリ十二時迄ニ當校
医局ヘ出張いたし呉候様御取計有之候様
右之段掛り御氣ニ付速回状ヲ以テ達ニ
本省ヘ相願候也

明治七年三月三十日

東京医学校長 [illegible]

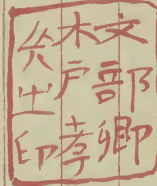
木戸文部卿殿

書面之趣聞届候事

明治七年三月三十一日

文部卿木戸孝允印

當校鑛山学官費生徒首藤諒一儀ハ般定期
試業ニ上外國語学校ヘ差送候處鑛山学生ト自
霊別殘之通退学願出候間一應前途之目的等
相尋候処前文引殘之通申出候ヘ共抑今日以テ官費
生徒ヲ罷ルヽニ至リ候ハ畢竟本人身上ニ就テハ利
害得失等懇ニ説諭滞校勉学ハ為シ候様申諭候
得共同人鑛山学科ハ元来志願ニ無之ニ付徒ニ自
費ヲ以テ從業シ目途無之候上ハ志願之学科
ニ從事シ修業仕度旨再三強テ申出候ニ付官費生
規則第十五章中ニ退学出願有之候ハヽ退学スル云々
ノ條ニ照シ退学差許可然哉官費生之儀ニ付
此段為念一應相伺候也

東京開成學校

開成学校
辻新次

七年三月廿日

木戸文部卿殿

伺之通

明治七年三月三十一日

文部卿木戸孝允之印

當校生徒ヘ畫学教授致シ候ニ付テハ用候図法階梯是迄木版ニ候處何分精巧緻密ニ不至尤モ写本省編書課ヘ備有之石版器械當分相借リ右ヘ畫学教員山岡成章高橋元亨両人ヘ従事為致摺写候様致度候条此段御許可有之度奉伺候也

開成学校

明治七年三月十四日　辻新次

文部卿木戸孝允殿

追テ墨汁油等ハ当校ニ於テ相弁シ候条此段申添候也

伺之通

但用紙之儀ハ編書課在来之ノ品相用可然候事

明治七年四月四日

並ニ天文書是仏國ハ此項文ニ於テ右同ハ之
去ル二月廿七日ヲ校費確定ニテ右校定
費ニハ内ヲ以テ適宜ニ之ヲ可然哉ニ御令
相成候処定費令ニ於ハ割リ第二月以来出
定相成候テ故何分即チ贏餘ノ金モ無之
購求淵相成候処協会ニ因リ並弱ト因難ニ至リ其
ニ本年ハ金星ノ太陽ト我地球トノ間ヲ経過
スル年次ニ當リ天文術業者ノ尤モ一大事
業ニ有之抑金星ノ軌道ヲ運行シテ太陽ト
地球トノ間ヲ過リ一直線ヲナスニ定期二次ア
リ其相距ルノ年等シカラス率ネ十二年ニ一
次百八年ニ一次如是周リテ更ニ同位置ヲ

ナスモノナリ依テ日金地正對一直線ヲナ
スノ時ニ當リテ星影ノ日面ニ寫ルヲ目的トシ
最精子午儀ノ功力ニ籍テ太陽ノ大サヲ細
測シ日地ノ距離ヲ推究考定スルヲ得べキ
ナリ已ニ一千七百六十一年同六十九年兩次ニ泰
西天文博士之ヲ實測セシカ當時精巧ノ天
文器全ク具ラサルニ困テ其意ヲ果サス然ルニ
當一千八百七拾四年（即明治七年）十二月八日ハ右期月ニ
當ルヲ以テ英仏獨米等ニ於テ前業ヲ果サ
ント欲シ相競フテ其用意ヲナストヿ且又
我日本國ハ之ヲ實驗スルニ經緯トモ甚タ適
當ノ位置ナルニヨリ各國天文學者尤踵シテ
来朝シ東京或ハ横濱等ニ於テ地ヲトシ金
星實驗臺ヲ設為シ之ヲ測量セントト既ニ其
用意ヲシタルモノアルト云フ然ルニ當先般當
校中天文學教場ヲ設ケ相成右試措所建
築ノ段モ御許可ノ當六七月頃ニ至リ落成ノ姿
相成右試措所ニ於テ金星ノ經過ヲ實測
イタシ度省ニテ過般伺出候器械目録中
子午儀至急御買入ノ段教授レピニエヨリ
申出候右ヲ唯此子午儀ヲ欠クノミニテ此ノ一
大事業ヲ徒ラニ傍觀シ又之ヲ行フ能ハサレハ
獨リ遺憾ノ至ノミナラス此盛期ニ際会シ
此実臨ニ傳シ候テ實ニ笑ヲ各國ニ取ルノミ
ト存候間何レニモ定費撰合右子午儀買入
申度候然ル處右價大凡二千五百元ニ候可否

伺之通

但別紙回答書朱點ノ分ハ削去リ可申事

明治七年四月廿二日

於東京

千八百七十四年第四月十六日

吾カ疾病昨今ノ容躰ニテハ當分ノ内授業イタシ難キ段吾當月十一日田中君マテ報知セリ

吾兼テ志願ノ一件ニ付一等醫士ベンケマ氏ヨリノ胗断證書ヲ貴下ノ覧閲ニ供シ候條之ヲ文部省ニ上申シ吾カ六ケ月ノ休暇ヲ賜ンコヲ懇願セルハ於吾無餘儀情實アルヲ明白ニセンコヲ伏テ冀フ

エミール　レピシエ

開成學校長

東京開成學校

レピシユ君容躰書

アチミー病ニシテ五体虚弱甚シク仍テ歐行療養セザレハ快氣ニ赴キ難キ容躰ニ有之候也

東京軍醫寮醫士
一等醫士
ベンケマ

於東京千八百七十四年第四月十五日

辻君

貴下ノ病症欧行ヲ要スルコヲ文部省及ヒ余ニ證センタメ一等医士ベンケマヨリノ診断證書及ヒ余ニ於テハ貴下欧行セサレハ其病癒サルコニ於テ決シテ些疑ヲ容レス故ニ文部省ニ於テ敢テ之ヲ止メス已ニ文部卿ヨリ此事ニツキ回答サレタリ然ラハ解約ノ上ハ貴下出立随意タルベシ貴下ノ欧行ニツキ如何様ノ事理アリトモ六ケ月間ノ休暇ヲ與フルコ許可スル能ハス文部省ニ於テ此レヨリ他ニ答フベキナシ之ヲ結局トス辞トス

開成学校

辻新次

明治七年四月廿二日

正院御指令之伺也

七年四月十八日

東京開成学校
柳本直太郎
辻　新次

木戸文部卿殿

追テ英文学生徒之義者教学修業
不致テハ不相成事ニ付当教授之義ハ
追テ可伺出候条此段申添候也

伺之通

明治七年四月廿四日

文部卿木戸孝允之印

去ル壬申十月中給貸法施行之義
舎則一層厳重ニ致シ候所テ経伺之上
級長ヲ置候處即今実地ニ着キ之ヲ見
ルニ召為無実ニ近ク候ニ付右級長ヲ廃シ
更ニ当直及ヒ級首ヲ設ケ候ニ付之ノ義
其条則併方法書案ヲ以テ相伺候間
御詮議之上御指令可被下候様致度候也

四月十九日

東京開成学校
柳本直太郎
辻　新次

木戸文部卿殿

伺之通

但級首ハ級長ト可相改事

明治七年四月廿四日

文部卿木戸孝允之印